幼児の造形表現における素材・材料の研究
― 造形活動における諸問題の考察とストラッポ技法を応用した絵画制作の実践記録について ―

堀内　秀雄・杉本　亜鈴・小金井啓子・牧田　　愛

Ⅰ　はじめに（研究目的）

造形教員として授業や活動を行う中で、子どもたちが作品を制作することにどれだけの必然性を感じているか、ものをつくるという経過のなかで目的意識をどのように認識しているか、という問題に直面するシーンがある。この問題は対象となる子どもの年齢を問わず、幼稚園から大学まで起こり得る本質的な問題であると考えられる。

造形作品を「つくる」という行為は、表現の意思の具現化であり、本来は作り手の表現の欲求に基づく活動である。しかし現実問題として、教育の場で行われる造形活動の動機付けは、そのほとんどが基本的に教員サイドによって用意された発達のためのプログラムであり、定められた教育課程の中の限られた予算・時間・設備のなかで半ば強制的に行われる造形活動は、必ずしも子どもの表現の欲求に基づくものではあり得ない。

このような問題を解決するために教育の現場で造形活動に従事する指導者たちは、子どもの発達段階や、それぞれの教育課程において望ましい効果を得られる課題を模索し、素材や材料の選択に工夫を凝らして来た。しかし、そもそもの造形作品を「つくる」という行為における、自己の表現のモチベーションを意識することの重要性は、どこまで厳密に議論されてきただろうか。

幼児教育の現場における造形活動では、教員の裁量幅が大きい分、この問題の重要性が浮き彫りになりやすい環境にある。そこで、このような造形教育が抱える理想と現実のギャップを埋めることができれば、造形活動の目的達成・効果の底上げをすることにつながるのではないかという着想に至った。具体的には、各園の指導計画や取組みの特色、そして学年やクラスごとに抱えている日常の小さな問題から造形活動の技法や材料を選定し、問題解決のためのプログラムを作成することが可能なのではないかという仮説に基づいたものである。本研究は、制作活動を通して、発想と効果検証の方法論を実験的に見直す活動の記録である。

Ⅱ　研究方法

1　研究計画

（1）研究の基本姿勢

本研究に臨む基本的なスタンスとして、研究者は作品制作者としての観点や経験をもとに研究成果を保育の現場に還元していくことを目指している。具体的な方法として、まず、本研究が造形教育の現場における諸問題、つまり日常の保育における造形活動の中の困難や懸案事項の解決に役立つことを研究成果としてとらえ、保育現場の教員の声をサンプリングすることを研究のスタート地点とした。次に、問題解決のための試験的な造形活動のプランを

立て、制作という具体的な行動を通して問題解決の在り方を模索していく。これにより本研究のプログラムは子ども・保育者・保育者養成機関教員である研究者の共同作業となり、研究成果の還元サイクルが恒常的に位置づけられると考える。研究成果の還元サイクルを一過性の効果にとどめず、言わばスパイラル状の成長を続けていくことを目指すことが本研究の特色となっている。

この基本姿勢に基づき、今回の研究計画の立案に際して事前に東京成徳短期大学附属第二幼稚園の教員を対象に、造形活動に関する諸問題について面談方式の聞き取り調査とアンケート調査を実施した。

（2）事前調査

面談方式の聞き取り調査は、実践活動（造形ワークショップ）の対象となる東京成徳短期大学附属第二幼稚園の年長クラスの担任教員２名に対し、大学で実施した。聞き取りを行ったのは研究者３名（本学造形教員：堀内・杉本・小金井）である。聞き取りの主な内容は園での「造形活動においての困りごと」であり、園児たちの日常の様子や教員として感じる学年・クラスごとの特色などの話題を交えながら、口頭で質問を行う形式で調査を進めた。聞き取りにあたっては、調査対象が附属幼稚園教員であり本学の卒業生であるという利点を最大限に活かし、忌憚のない意見交換の場となるよう、くつろいだ雰囲気での会話を心がけた。聞き取り調査の結果「解決していきたい問題」として話題にのぼったキーワードの中から研究チームは以下の２点に着目した。

a：造形課題の目的やねらいと違う方向に子どもの表現の欲求が発展していった場合の対応
b：造形活動で起こる「まね（模倣）」の取り扱いと対応

上記２点の問題を選定した理由は、これらが聞き取り調査の場に居た教員全員の共感を得た問題であり、地域や年代といった差異に関係なく普遍的な問題として解決の方法を模索するのにふさわしいテーマとなる可能性を有すると判断したためである。

調査の次段階として、附属第二幼稚園の教員の中で今年度クラス担任を持っている教員を対象に記述式アンケートへの回答を依頼した。

調査内容（アンケート項目）を以下に記載する。

● 調査方法：記述式アンケート（記名方式）
● 調査対象：東京成徳短期大学附属第二幼稚園教員（クラス担任従事者６名／回収率100％）
● 調査期間：平成26年７月
● 調査内容（質問項目）：

問１：日常の造形活動についておたずねします。「目的」や「ねらい」とは違う（あるいは逆の方向）に子どもの造形活動が発展したことがありましたら、その事例について、先生のその時のお気持ちや対応をお教えください。

問２：造形活動におけるまね（模倣）の行動について以下の質問にお答えください。
（１）まね（模倣）についてどのようにおかんがえですか（肯定的側面＆否定的側面）。
（２）造形活動におけるまね（模倣）の事例について概要をお教えください。

（3）その時点での対応や考察についてお教えください。
（4）まね（模倣）のケースについて、今後、指導の方向性をどのようにしていきたいと思いますか。
問3：その他、研究実践に関するリクエストや要望について（自由記述）

（3）調査内容の分析と実践計画の立案

今回のアンケート調査は実施の母数が少ないため、信頼性および客観性に関しては一定の配慮を必要とするものである。しかし少数ながら回答に含まれる情報量は予想以上に多く、回答内容に取り上げられた造形活動のシーンも多岐に亘るものであった。回答の文章量はアンケートに設定した記述欄一杯に書かれており、これは造形活動における普遍的な問題に関する質問として複数の教員の共感を得られたと判断できる材料となり得た。基礎研究の着眼点としては手応えを感じさせるものであったが、具体的な問題解決の方法を提案するには問題の論点を絞る必要性が発生してきた。

そこで、聞き取り調査の際に取り上げたふたつの課題のうち、まず今年度の実践においては「造形課題の目的やねらいと違う方向に子どもの表現の欲求が発展していった場合の対応」について実践研究を進めることとした。記述式アンケートの問1である、「目的」や「ねらい」とは違う（あるいは逆の方向）に子どもの造形活動が発展したケースについては回答者6名全員が体験や事例を挙げており、多くの教員や保育者が直面する課題である可能性を示唆していた。個別の回答文章から共通する方向性を読み取り、整理・分析していくと、その傾向を以下のようにまとめることができる。

① 保育者の設定した「目的」や「ねらい」から子どもの表現が逸脱したケースに直面した経験を持つ
② 子どもたちが楽しく自発的な表現を始めた場合はその方向性を尊重したいと考える
③「目的」や「ねらい」を逸脱した場合は課題の成功に繋がらないと考える
④「目的」や「ねらい」を逸脱した責任は課題の運営を行う自分自身にあると考える保育者が多い

2　研究実践プログラムの作成

（1）　作品試作と検討

上記アンケートから抽出された内容を元に問題解決のための実践プログラムを作成する。今年度は絵画（描画活動）に関する記述に着目し、実践プログラムの作成は2名の絵画担当研究者（杉本・小金井）で行った。プログラム作成において特に重要視したのは以下の項目であり、これをもとに作品試作とプログラムの検討を行った。

① 子どもの体験に起因した動機付け → 体験に基づいたテーマから自発的な表現を促す
② 絵画の特徴である次元的イリュージョン性を活用 → 子どもの想像力・イメージの拡大をはかる
③ 簡便な人体表現の写実性保持 → 子どもたちが主体的に自己を表現することができるようにする
④ 専門的絵画技法の応用を盛り込む → 新しい技法の獲得により表現の可能性を拡大する

⑤ 身近な材料を用いる → 実践後の発展的応用が可能なように手に入りにくい画材の使用を避ける

Ⅲ　研究実践の記録

1　実践活動の概要

（1）：平成26年度 研究実践活動一覧

活動の名称	実施日	主対象（参加人数）	会　場
①わくわく造形ひろば ワークショップ	H26年８月28日	５才児とその保護者（約80名）	東京成徳短期大学附属第二幼稚園
②東京成徳短期大学附属第二幼稚園教員研修会	H26年８月28日	幼稚園教諭（約10名）	東京成徳短期大学附属第二幼稚園
③第26回東京成徳短期大学保育研修会	H26年11月８日	現職保育者（約30名）	東京成徳短期大学

2　制作活動の実践記録

上記平成26年度 研究実践活動一覧のうち、作品制作の実践を行ったのは①と③の活動である。ここでは、５才児とその保護者にワークショップ形式で行った①の内容を中心に実践活動の記録を時系列に添って整理する。

（1）実践プログラムの概要

タイトル：「わくわく造形ひろば」～ 海の絵で泳ごう！ ～
内　容　：年長組親子対象ワークショップ
日　時　：平成26年８月28日（木）９：30～11：00
場　所　：東京成徳短期大学附属第二幼稚園
対　象　：年長クラスの幼児と保護者（80名程度）
講　師　：杉本亜鈴・小金井啓子（東京成徳短期大学）
目　的　：① 導入の工夫により人体の描写（全身像）を楽しむ
② 材料の特性を活かした描画の展開を体験する

（2）使用した材料および用具の概要

① 青色の布各種（木綿・サテン・オーガンジー各種各色５m程度）
② オイルパステル（サクラ社製「クレパス」12～36色セットを20箱程度）
③ フィンガーペインティング絵の具（ペベオ社製「紙用タクティルカラー」80ml、20本程度）
④ ビニールクロス（市販の透明テーブルクロス、120㎝×５mサイズを２本）
⑤ 木工用ボンド（市販の酢酸ビニル系のもの、３kgボトルを３本程度）
⑥ 刷毛（一般的な描画・塗装用のもの、20本程度）
⑦ ブルーシート（床面の防汚材と水中イメージの環境設定材料として５m程度２枚）
⑧ 手足洗い用の水タライ（６個程度）
⑨ 手足拭き用の雑巾（30枚程度）

（3）制作の手順と内容および背景となる各技法からの検討

①布を使ったイントロアクション（会場のホールを海に見立てる）

今回のワークショップで設定したテーマは「夏の水遊びの思い出」である。これは、研究の実践活動の日程が夏休みの終盤に自由登園日として設けられていたことによるねらいが大きい。夏休みを過ごした子どもたちが共有しやすい経験をテーマとして設定することを考え、海やプール、幼稚園での水遊び体験を絵のテーマとして取り上げた。子ども自身の体験や経験から描画の制作意欲を引き出すという動機付け自体は、造形教育において極めてシンプルでスタンダードなものであるが、ここでは子どもたちと大人との共通の話題が必要であり、誰もが共有しやすい体験として「水遊び」をテーマとして選び、子どもたちが感情移入しやすいテーマを設定することで描画活動へのスムーズな導入を促した。更に海に見立てた布あそびの活動を通して、会場内での体験の共有と水遊びの記憶の反芻を試みた。

また、短期大学教員である研究実践担当者と附属幼稚園の子どもたちはほぼ初対面に関係にあり、これは導入や動機付けの観点から見ればマイナス要素であるため、教員や保護者の積極的な活動参加の協力を要請した。子どもたちにとって「知らない大人」である研究実践担当者と造形活動を行うには、園の教員や保護者が一緒に活動に参加することが導入成功の鍵となるという考えに基づいたものである。

②オイルパステルによる描画（泳ぐ自分の絵と海の中の情景を描く）

水遊びの体験による動機付けの段階を経て、水中で泳ぐ自分や友人の姿を想像して描いていく活動に入る。描画の発達段階から鑑みれば、年長児を対象とした今回の実践活動は高度な人体描写を期待されるシチュエーションにある。ただし「水中」という設定により天地の概念やモチーフの重なりといった制約を受けない点で表現の自由度がある程度担保される環境を設定することが可能となった。

今回は支持体がビニールクロスであるため、画面に対して描画材が滑りやすく色が乗りにくい。このためオイルパステルの中では柔らかく固着力が強いクレパス（サクラ社製）を使って描画を行った。

人体描写にあたっては「泳ぐ」というポージングの難しさの課題が存在したが、画面のサイズを大きく作り、床置きしたことでポージングの型取りが可能になった。画面上に寝転んだ姿勢で泳ぎのポーズをとった子どもの体の輪郭線を他の子どもや保護者がクレヨンでなぞることによって形を写し取ることにより、手軽に人体スケールの的確な表現を行うことや、三次元的な躍動感を表すことが比較的容易にできるようになった。

子どもたちが泳ぐ姿を描いた後は、積極的にイメージの広がりを促した。これは共同制作、つまり大人数による大作の描画において子ども個人の表現の集合による多様性を加味したいという意図に基づくものである。導入時の人体の型取り手法によってある程度の写実的な描写表現を行い、活動や表現上のリアリティーを得ることはできるが、型取りはあくまでも転写であり子どもの絵画表現とは言い難いためである。「海の中を描こう」という言葉がけに応じて、多くの子どもや保護者たちは自然と水棲生物を中心に海の中の環境を描いていったが、「実際の体験」による記憶よりも、水族館や本・テレビ等で「見た体験」から図式化表現した海の中を描いている様子が見られた。ここでは人体の型取り手法による導入から子どものイメージの広がりを重視して描画に密度を持たせていく過程を重視しているため、

現実ではない描写や空想上の出来事を描くことを特に規制せずに制作を進行した。

③フィンガーペインティングによる着彩

子どもの場合、描くという表現の衝動・欲求が必ずしも描画の段階的な作業と一致しないケースが日常的に散見される。例えば人体を描こうとしたときに、まずクレヨンやマーカー、鉛筆でといった描画材料で人体の輪郭や目鼻、衣服の模様といった細部を描き、これに水性絵の具で着色しようとする。すると絵の具がはみ出したり、絵の具の種類によっては描画部分が塗りつぶされてしまったり、線描や細部の描き込みが溶け出してにじんだりすることになる。イメージ通りに絵を描こうとすると、完成作品を想像する明確な意識と画材の知識、そして手順の逆算という高度な作業が必要になる。

多くの保育者や子どもにとって、せっかく描いた人物像が着彩の際に絵の具によって消えてしまうとそれは「失敗」と認識されるだろう。筆者は絵画表現においては、塗りつぶしの表現や作業の退行が必ずしも失敗の部類に入るということではないと考えるが、この段階を「成功」ととらえることは子どもにとっても大人にとっても難しい。特にフィンガーペインティングのように道具を使用せず、絵の具の感触を楽しむ動きや、絵の具を塗り付ける手の動きがダイレクトに反映される原初的な表現活動は、先の段階で行った描画材料を使った写実的で細かな人体表現とは対極に位置するもので、子どもにとってはダイナミックで制約が少ない分だけ楽しい活動であり、コントロールの困難が予想される。そこで今回の活動では「ガラス絵」の技法をアレンジした。「ガラス絵」は文字通りガラスやアクリル版に描画を行う技法であり、透明な支持体を用いるその特性から、完成した作品は最初に描いた部分が最も画面の手前に来るようになっている。つまり本来は紙や板に描く手順を逆にたどる高度な技術を必要とする絵画技法であるが、今回の活動では支持体が透明のビニールクロスであることと、最終的に画面をこの支持体から剥がす「ストラッポ」の作業を行うため、手順や材料選びの困難を回避することができる。ビニールクロスはホームセンター等で広く一般に販売されている透明のテーブルクロスを使用した。ビニールクロスは薄手のものは持ち運びや保管の利便性があるが、描画や乾燥・保管の際にしわが寄りやすいという難点がある。これに対し厚手のビニールクロスは、薄手のものと比較して価格が高くなるが皺が寄りにくいという利点がある。

④木工用ボンドとオーガンジー布による画面の裏打ち

今回使用した絵の具とボンドは、どちらも同じ石油系合成樹脂エマルジョンであり、可塑性が高く伸縮に強い特性を持っているためクラックや剥落の心配は少ないが、時間的な余裕があれば絵の具（アクリル樹脂）の乾燥を待って木工用ボンド（酢酸ビニル樹脂）を塗布した方が画面の保存効果は高まる。

画面の裏打ちに木工用ボンドを使用した理由は、一般的に手に入りやすく安価であることが大きな理由である。描画用のアクリルエマルジョンのほうが発色や透明感、フィンガーペインティング画材との相性、また作業中の臭気といった点で画材として優れているが、保育現場で課題を行ううえでは価格や準備段階での負担が大きいと考えた。

一方、画面を剥ぎ取る段階での支持体（足場）として使用したオーガンジー布は、「海の中」という今回の画題の設定に応じて完成時の透明感や光沢といった布の風合いを重視して

選定したもので、これは安価な寒冷紗やガーゼ状の綿布でも充分代用することができる。

⑤一次鑑賞

画面の乾燥（固化）には夏場でも約１日を要する。描いてすぐに完成した絵を観ることはできないという点は、制作者である子どもたちの描画の達成感や活動の振り返りという観点からはあまり望ましくない。しかし、本課題では支持体にビニールクロスを使用していることで、画面を持ち上げて裏側から鑑賞することができる。裏打ち布（今回はオーガンジー布を使用）や絵の具（今回はフィンガーペインティング用の絵の具と木工用ボンドを使用）の透明性を保持することで、画面を裏側から鑑賞した場合も、光の透過による色彩効果を得ることが可能である。

⑥ストラッポ（画面の剥ぎ取り）

フレスコ画のストラッポ（strappo：剥ぐ）技法や、トランスファー（transfer：移行・移植）技法に着想を得て、画面を剥ぎ取る。透明ビニールクロスから画面を剥ぎ取ることで作品自体の軽量化が可能になり、支持体がビニールクロスからオーガンジー布に変換するため、吊るす・掛ける・結ぶ・切り抜くといった展示の可能性を拡大することができる。

⑦二次鑑賞と作品の保管

画面を剥ぎ取ったときに最初に描いたものが画面の一番手前に現れるという表現の特性は、子どもたちに完成時の感動を与える要素であり、これは版画のモノプリントに共通するものがある。この「剥ぎ取る」活動と展示における感動や感受が本題材の二次鑑賞に繋がる。

作品の保管に関しては、アクリル絵の具・酢酸ビニルボンドともに石油系合成樹脂を媒材としているため、画面同士を密着させて保存すると癒着が起こる。このため、ロール状に巻いて保管する場合などには描画の際に支持体として使用したビニールクロスを巻き込んでおく必要がある。

写真１：布を海に見立てた活動

写真２：ビニールクロスにオイルパステルで描画を行う

写真３：フィンガーペインティングとボンド塗り

写真４：オーガンジー布の裏打ち

写真５：一次鑑賞の様子

写真６：剥ぎ取り後の画面（部分拡大）

Ⅲ　検証と考察および課題の再構成へ向けて

絵画は絵の具の重層化によってその表現価値を高める。特に油性画材によって描かれた絵画作品は塗膜の重なりによって表現者の意思と力の痕跡が重ねられていくため、失敗を恐れずに描くという作業を積み重ねていくことができる。このような絵画の特性から、事前アンケートの調査結果から導きだされた「目的」や「ねらい」とは違う（あるいは逆の方向）に子どもの造形活動が発展したケースの問題解決方法として、油性の絵の具を使用した描画活動は一定の有効性を有していると言える。つまり簡単に言えば「失敗しない画材を使って、失敗しない手順で絵を描けば、成功と呼べる一定の効果を得ることができる」というのがこの時点での結果である。

しかし一方で、失敗から生み出される成功が子どもの成長に大きな寄与を果たすファクターとして存在しているのも事実である。「失敗」の概念が発展的に変容し、「成功」と認識されることで獲得される発達である。

今回のアンケート調査および制作実践から抽出された問題の深い部分には造形教育における描画活動の「成功」と「失敗」の捉え方という問題が存在する。

そこで、研究の次段階として「成功」のビジョンをもう一度見直してみよう、という活動に着手した。子ども・保護者・保育者のそれぞれの観点から「成功」を考えてみる活動と、

指導計画案の様式の多様化によって現行の題材を活性化させようという試みである。現在は現職保育者から意見を集めている段階であるが、「子ども・保護者・保育者のそれぞれの観点から明確な失敗だけを規定し、それ以外の可能性はすべて成功という効果に分類する」といった画期的なアイディアも出ているため、今後の基礎研究の継続に期待したい。

参考文献

三野哲二　『フレスコ画の技法』　日貿出版社　1998年
R・J・ゲッテンス　G・L・スタウト 著／森田恒之 訳　『新装版　絵画材料辞典』　美術出版社　1999年

研究協力：東京成徳短期大学附属第二幼稚園